

前田 和夫 (マエダ カズオ)

メック株式会社社長



## コンセプトは「界面創造」

### ◆中間期決算は増収増益

当社の主力工場が今回の新潟県中越地震の震源地に近い長岡市にあり、各方面にご心配をお掛けしたが、地震が週末にあり、その翌営業日から操業もしており、お客様にご迷惑をお掛けしない状況になっていることを、まずご報告したい。

当社は先年、大証ヘラクレス（当時はナスダックジャパン）に上場し、平成15年4月に東証2部に上場させていただいた。東証2部の上場基準の一つに株主数800人以上というのがあり、当社株主は平成15年9月時点で590人まで減っていたので、平成16年3月末に立ち会い外分売をした。その結果、株主数は2,422人となった。平成16年9月現在では1,750人である。

当期中間期（平成16年4月1日～同9月30日）の決算のポイントとしては、まず、前中間期比増収増益となった。売上高は30億25百万円、前中間期比3.0%増、そのうち薬品の売上が26億98百万円で、同8.3%増。営業利益は5億35百万円、同15.7%増であった。パソコンの中でもMPUのパッケージ基板に特に必要な超高精細対応の新製品を発表し、これがこの中間期にかなり業績を拡大した。また中国で、メック蘇州を2001年に立ち上げ、さらにメック珠海を2003年に立ち上げた。ここでは高付加価値の電子基板を作るのに必要な高級薬品を生産しているが、それがようやく採用されるようになってきた。一方、欧州ではドイツ経済を中心としてあまり芳しくないが、当社としては難しい電子基板を作っているエリアと、そうでないエリアを2本の柱とするような形で、横ばいかそれ以上の業績を上げていきたいと考えている。

決算の中身をやや詳しく説明したい。まず売上高は前述のとおり30億25百万円、前中間期比88百万円、3.0%の増収、計画比では62百万円、2.1%上回った。特に薬品売上高は26億98百万円、同2億7百万円、8.3%の増加となった。売上総利益は18億72百万円、同1億54百万円増加であった。これは薬品の売上増と、その売上総利益率のアップによる。販管費は13億36百万円、同81百万円、6.5%増となった。これは人件費、運賃、旅費交通費、支払手数料、研究開発費等が増加したためである。その結果、営業利益は5億35百万円、同72百万円、計画比4百万円増となった。ただ単体の営業利益は前中間期を30百万円ほど割り込んでいる。経常利益は5億55百万円、同1億41百万円、34.2%増となり、計画比50百万円増であった。これは為替差益が53百万円発生していることが影響している。税金等調整前中間純利益は5億84百万円、同1億72百万円増であった。中間純利益は3億58百万円、同1億10百万円の増益、計画比18百万円増であった。

貸借対照表の特記事項としては中国で珠海の工場が立ち上がり、製造販売を開始した。これに伴い有形固定資産が増加した。固定負債では役員退職慰労金制度が廃止されたことに伴い打ち切り支給額が確定、それを「その他」に振り替えている。単体の貸借対照表では投資有価証券でメックヨーロッパの株式を20%取得し、100%子会社とした。

当中間期の営業利益を前年度の下期と比べると連結で55百万円減、単体では2億48百万円で83百万円減となっている。売上は若干前年度下期より増えているのに、営業利益が減ったのは販管費が売上総利益の伸び以上に増えたためである。

また経常利益を前年度下期と比べると連結は増加、単体は減少している。当中間期は為替差益があったのに前年度下期は為替差損があったほか、単体では前年度下期に子会社からの受取配当金があったためである。

さらに純利益は連結、単体共前年度下期に比べ伸びた。これは生命保険解約による返戻金が特別利益として計上されたことも影響している。

### ◆通期見通しも増収増益

売上高は平成14年3月期以来、連、単共増加してきたが、平成17年3月期の売上高は60億46百万円と前期比わずかな伸びとみている。営業利益は連結で修正予想10億64百万円、前期比1.1%増、単体で5億32百万円、同12.8%減とみている。これは当初計画では売上を上期に比べ下期を厚めにみていたが、市場環境が変わっ

---

てきているので、低めにしたこと、販管費の増加があること等が理由である。経常利益は連結で10億66百万円、前期比12.7%増、単体は6億25百万円、13.7%増とみている。これには上期の為替差益も影響している。純利益は連結で6億96百万円、前期比18.2%増、単体では4億18百万円、同43.6%増とみている。

なお、平成17年3月期の連結、単体の予想の修正について申し上げますと、期初の予想は売上高61億94百万円、営業利益11億91百万円、経常利益11億41百万円、当期純利益7億55百万円とみていたが、これを前述のとおり、10月21日付で、いずれも下方修正した。当初のもくろみとしては内部努力のほか新製品が年度後半に収益に結び付くとみたほか、中国での業績向上などを考えていた。しかし、昨今エレクトロニクス関係では、ちょっと一服感が出ているので、我々の得意としている半導体パッケージあたりは、ちょっと難しい環境になるかもしれない。その代わり、これから収益を稼ぐものが具体的に見えていること、中国、台湾はそれなりに期待を持てることなどから、下半期は上半期と大体同じような数字を出せるだろうと考えた次第である。ただ前期実績比では増収増益の見込みである。

### ◆薬品の売上比率が上昇

次に連結の品種別売上構成の推移を見ると、当社の主力である薬品の比率が年々上昇している。当中間期では90%近くが薬品の売上である。薬品の内訳を見ると、銅表面処理剤の比率が上昇、全薬品に占める割合は68.1%となっている。

設備投資は当中間期2億17百万円、前年上期、下期に比べても増えている。珠海工場の建物、設備の関係のほか、日本でも管理用コンピューターシステムを導入したためである。所在地別売上高を見ると、日本が前年度上期からやや低下、一方、アジアでの売上高が上昇している。これにより海外売上比率は徐々に上昇、当中間期は43.6%になっている。

### ◆ポイントは研究開発と販売力

研究開発にはどのような状況の下でも、しっかり投資していく。販売力の方は日本、中国、台湾、韓国にかなりの経営資源を集中している。新製品に関しては、より高精細な、特に半導体を乗せるタイプのポリイミドベース基板用のCHシリーズの需要が出てきている。また汎用多層基板用のBO代替シリーズは主だったお客様に順次ラインを導入されている。これが本格的に稼働してくると、今期後半くらいからそれなりに収益に貢献してくるとみている。

新製品開発については次世代または次々世代向け製品に関する特許出願が27件に上っている。

工場別の生産量について見ると、メック蘇州の生産能力は当初月産150トンであったが、その後の増設により、現在200トンのレベルで操業している。メック珠海はもともと300トンの生産能力があり、現在、200トンくらい作っている。国内では長岡工場と西宮工場がある。当社の主力製品はCZ8100という薬剤で、これはパッケージ基板に使用されているが、最近、特に高付加価値の基板について、より高精細な配線パターン対応の新製品CZ8101を出すようになった。8100を8101に切り替えると、使用量は減る傾向となる。新製品は少ない量で同じような効果が得られるためである。効率の良い薬品でお客様の生産効率を上げていくとともに、それによって値下げ圧力に対応していくことが今後の大きな課題である。

### ◆長岡工場は地震の被害なし

長岡工場は1985年に設立、今当社の主力工場となっている。今回の中越地震でどうなるか心配したが、地震の翌日の日曜日に点検したところ、幸い、建物、社員に被害がないことが確認された。月曜の午前中に設備を入念に点検し、その午後には試験生産を行い、問題ないことが分かった。後は資材の調達とお客様へのデリバリーがうまくいくかどうかであったが、物流会社から非常に協力していただけるというコミットメントを頂いた。これは不幸中の幸いであり、今回の地震が当社の業績に影響することはないことをご報告する。

## ◆ 質 疑 応 答 ◆

**販管費の今期、来期の見通しはどうか。**

今期は26億70百万円、来期はまだ固まっていない。

**CZ8101を含め薬品中の新製品のシェアは今期、来期どのくらいになるか。**

---

新製品のシェアは今期10%くらい、来期は30%くらいとみている。

**10月に入ってからの業況はどうか。**

10月は特段問題なく進んでいるが、10～12月については、厳しめにみている。ただ一般の電子基板では、それほど在庫がたまっているわけではなく、半導体関係の領域よりも早めに注文の山が来ている、というような情報もある。

(平成16年11月10日・東京)